



第42回JLBCクイーンズオープン プリンスカップ

12月4~7日 品川プリンスホテルBC

長いトンネル抜けた！ 谷川章子が11年ぶり涙の6勝目



▲左から優勝・谷川、2位・桑藤、3位・川口、4位・坂本、ベストアマ・芳賀選手

今大会の参加選手は、アマチュアの選抜大会を含めて総勢387名(プロ160、アマ227)。8Gトータルの予選(A・Bゾーン上位各48名選出)、2Gマッチの決勝トーナメントを勝ち上がってベスト4に生き残ったのは、谷川章子(37期)、桑藤美樹(45期)、坂本かや(49期)、川口富美恵(32期)の4名だった。

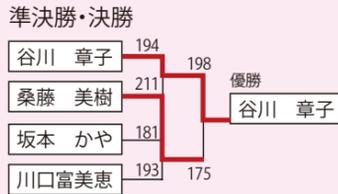
4名による1Gマッチの準決勝シュートアウトは、3年前の大会覇者・桑藤が唯一200アップのスコアでトップ。次位争いは10フレ最後の一投まで勝負

の行方が分からない大接戦となったが、ストライク数は最少ながらノーミスの谷川が、川口を1ピン差退けて勝ち上がった。

優勝決定戦は一転「レーンの変化が早く感じて、その対応に悩んでかんでしまった」という桑藤が2フレ5本カウント(スペア)、3フレ⑩ピンカパーミスと序盤でつます。対する谷川も、2連発スタートを決めたものの、4フレで⑦⑩スプリット、8フレではバケットの⑤ピンをカパーミスと波に乗り切れず、4

フレ以降持ち直した桑藤の追い上げを許してしまう。

またしても10フレまでもつれ込んだ勝負は、先投げの桑藤が痛恨の⑩⑩オープン。これを見て「いい意味で開き直れた」という谷川が見事にパンチアウトを決め、08年の群馬オープン以来、じつに11年ぶりの優勝(通



▲ルール改正を見据え、2年前からリストタイを外して試合に臨んでいる谷川。今回の勝利は大きな自信になるはずだ



▲桑藤は「ベスト4まで残ったからには優勝しなかったと悔しさをにじませた」

算6勝目)に涙した。破る大金星を挙げ、総合8位で
なお、ベストアマはトーナメント4回戦で姫路麗(33期)を
手(東京)が獲得している。



優勝者コメント

優勝決定戦のレーンは、左右どちらも難しく感じました。ボールは替えずに中を投げたり、外に出たりといろいろやって、力んで投げミスもありましたが、結果的に「まだまだ踏ん張れるかな」と思える試合になりました。初優勝した直後のように、これからまた波に乗っていきたいですね。(優勝ボール:STORMコードワン)

●優勝決定戦

桑藤 美樹	8	15	34	43	63	83	101	121	149	167	175
谷川 章子	28	48	66	75	103	123	139	148	168	198	

FOCUS UP

井口直之プロはなぜ「レギュラーツアー引退」を決めたのか!?



▲「公式戦引退」という井口プロの決断は、現状に甘んじるプロ仲間への無言の問いかけでもあるようだ(12月17日、笹塚ボウルにて取材)

ランキング40位のシードプロとしてレギュラーツアーに参戦していた昨シーズン半ば、自身のSNSで突如「年内でトーナメントプロを卒業します」とアナウンスし、ファンや関係者を驚かせた井口直之プロ。「40代の今がいちばん脂の乗った時期じゃないか」と、強く翻意を促す先輩プロや仲間も少なくなかったが、井口プロは初志貫徹。最終戦の全日本選手権を総合30位で投げ終え、ランキング(15位)が確定した直後、今季のシードプロ辞退を協会に申し入れ、了承された。

「卒業」の文言が「引退」に変わったのは、昨年9月のMKチャリティカップで5位入賞を果たし、今季のシード入りが確定した後のことだった。

「シード落ちして辞めることになったら「卒業」、今のポジションをキープしていたら「引退」という表現を使おうと、自分のなかで勝手に決めていました。辞める前にもう一度優勝できたらカッコよかったんですが(苦笑)、前の年よりも上の15位で終わったことにホッとしています」

ボウリングを始めたのは19歳の大学時代。アルバイト先のセンター(荻窪ユアボウル)で鈴

木隆光プロ(24期)に出会ったことがきっかけだった。その後、2000年のジャパンオープンでベストアマ(総合9位)を獲得したのを機にプロを志し、04年、3度目のプロテスト挑戦で合格を勝ちとった。

デビュー6年目の08年には「ROUND1 CUP」を制してタイトルホルダーの仲間入り。以後は優勝こそないものの、コンスタントに上位入賞を果たし、ほぼ毎年シード圏内にとどまってきた。

そんな井口プロがキャリア17年、働き盛りの42歳にして公式戦から退く決断をしたのはなぜなのか?

「3年前に右ヒザの靭帯を痛めてから、思った以上にカラダの自由が利かなくなってきました。だましだまし投げるのが常態化していく自分に「これでアスリートと言えるのか?」と、ふと疑問がわいたんです。

また、ジュニアの育成に携わるようになって「自分たちはプロとして憧れの存在たり得ているのか?」と自問したとき、とくに男子プロのトーナメントは、業界外の人たちが応援したくなるような雰囲気、乏しいこと



▲公式戦最後の舞台となった全日本選手権では、仲間から労いの花束が贈られた

に、改めて気づかされたのも、今回の決断の一つの理由です」

協会ではトーナメント委員を務めている井口プロ。今後はそんな雰囲気、を少しずつでも変えていき、20代の若い選手が第一線で活躍して、世間に注目されるような世界にするための環境作り、に注力したい、という。

「息子(井口遼太選手)がナショナルチームにいて、『井口直之の息子』と言われてるのが可哀想。大したプロでもないボクの息子と言われるより、ボクが『井口遼太の父親』と言われるほうがいい。今は公私両面で世代交代の時期なんです(笑)」

2月に引退パーティーを開催

所属する笹塚ボウルでは運営面全般を任されている。「ジュニアの育成・開発に関しては、笹塚ボウルがいちばん環境を整えて

いると思いますし、エンターテインメントの空間としても多くのお客様に喜ばれています」と井口プロは胸を張る。

2月24日(月・祝)には、同所で自身の引退記念パーティーを開催することが決まった。ボウリングのフロアを使用し、笹塚ボウルらしい趣向を凝らした内容にしたいという。

「公式戦は引退しますが、ライセンスを返上するわけではありません。呼ばれば承認試合にも出るし、チャレンジやボウリング教室もやります。それと、もし息子が将来プロになったら、チーム戦で一度くらい一緒に投げてみたいですね(笑)」

いくち・なおゆき/1977年5月23日生まれ、東京都出身。170cm75kg、左投げ。2002年プロ入り(41期/ライセンスNo.983)。優勝1回(08年ROUND1 CUP)。笹塚ボウル/ABS所属。昨年度ポイントランキング15位、AVG211.86。